アイスキュロス
ソポクレス

高津春繁編

世界古典文学全集

8

筑摩書房

アイスキュロス・ソポクレス　　世界古典文学全集　第8巻

昭和39年9月25日 初版発行
昭和44年1月30日 3刷発行

訳者代表　高津春繁
発行者　竹之内静雄
発行所　株式会社 筑摩書房

東京都千代田区神田小川町2の8
電話 東京(291)7651(代表)
振替 東京 4123番
郵便番号 101－91

CS 20308

目次

アイスキュロス

縛られたプロメテウス　呉茂一訳　5

ペルシア人　湯井壮四郎訳　25

アガメムノン　呉茂一訳　45

供養する女たち　呉茂一訳　81

慈みの女神たち　呉茂一訳　104

テーバイ攻めの七将　高津春繁訳　125

救いを求める女たち　呉茂一訳　147

ソポクレス

アイアス　風間喜代三訳　173

トラキスの女たち　大竹敏雄訳　201
アンティゴネ　呉茂一訳　227
エレクトラ　松平千秋訳　255
オイディプス王　高津春繁訳　287
ピロクテテス　久保正彰訳　315
コロノスのオイディプス　高津春繁訳　345
解説　高津春繁　379
参考図
年表
索引

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

アイスキュロス

縛られたプロメテウス

巨人神ティタンの一人であるプロメテウスに関する説話は、ずっとギリシアの先史年代からあったらしく、ヘシオドスの両書にももうその話が相当委細に記されている。彼がティタンに教えられるところから見ても、恐らくは先住民族が祭っていた火の神のたぐいではなかったか、と推察されるふしが少なくない。

彼をまた人間の創造者とする伝説もパウサニアス『ボイオティア篇』によって伝えられるように、古くからあったらしい。しかしヘシオドスでは、人類は自然発生かもしくはゼウスがつくった（五世代説で）ものとされるが必ずしも明確でなく、ただ彼が人類の庇護者乃至は味方であることだけは疑う余地がない、そして天上の火を盗んで、みじめな人類に与えたほか、さまざまな生活技術をも教え授けたという（本篇）。

一般にギリシア民族固有の神々と先住諸民族の神々、それが移住後にどんな段階を経て、どんな様相をもちいて、融合され混和され分裂されたか、を識りわけることは極めて困難、むしろ不可能事で、われわれはその輪郭を、おぼろげに推察し得るにすぎない。ただティタンと呼ばれる神々の多く、たとえばクロノス、レア、オケアノス、レトなどが先住民族の崇拝した神々であると推定されること、アポロンやアルテミスがレトの子とされるのも、恐らく古い地域的関係（元来は先住民族から）にもとづくと考えられ、アテナ、ヘラ、デメテル等の性格なども、それとしてよく理解される。

プロメテウスとゼウスとの間の争いも、こうした古い関係に立つ事柄をもちいて、作者がここに神話学的、むしろ神学的な、新しい解釈を加えようとしたもの、と考えてよいかも知れない。『縛られたプロメテウス』は、アイスキュロスが物したプロメテウス劇三部作の第一で、あとに『解放されるプロメテウス』『火を運ぶプロメテウス』の二つが続くと普通推定されているが、由来こうした三部作の第一篇は、葛藤のまき起し、問題の提起点とされるところで、解決の方向とは反対の動きを示すことが多い。

アイスキュロスについては、『オレステイア』の初篇『アガメムノン』、ダナオス劇の初篇たる『救いを求める女たち』でも、この性格がよくうかがわれ、それ一篇としては観客に著しい不安と矛盾とを感ぜしめる。本篇におけるゼウスの一見しての専横や理不尽の振舞も、むしろ神話を利用してあい拮抗する動因をより大ならしめ、より高い抗争の電位をもちいて、より鮮烈な解決の火花をもたらしめようとの、作者の術策と見られぬこともない。

それゆえ作者は、ゼウスのこれまでの不正を枚挙する一方、至高神としてのゼウスの正義、その高い摂理を歌いあげることも忘れてはいない。ただ三部作の他の二篇が、わずかな断片を残すのみでまったく散佚してしまったために、わたくしたちはそれがどんな風に、どんな屈折を経て、大団円にみちびかれたか、を知ることができないのを遺憾とするばかりである。

『縛られたプロメテウス』で著しいのは、アイスキュロスの他の作と同様に、壮大な空想の飛翔である。それは白衣をまとい、雲の車に乗って出てくる大洋の娘たち、オケアニデスの舞唱団のごとく華麗でもあり、または牛の角を附け、狂おしく叫んで走り出るイオのように奔放でもありえる。また終りの、轟然と雷電のはためき鳴るあいだに、奈落へ沈む巨人の姿にも見られる。

なお本篇については、思想的内容と、いうところの文体からして、アイスキュロスの真作ではなかろうとの説が古くからある。しかし現在ではこの点はほとんど問題とされていない。上演年代についても、前四七八年のエトナ火山噴火の少し後と考えられたものが、文体などから六〇年代の末、つまり作者の最晩年作の一と見る説のほうが現在は有力である。

登場人物

権力と暴力　擬人化された神格、世界の主神たるゼウスの部下（ただし後者は無言）。

ヘパイストス　火と鍛冶の神、ゼウスの息子。

プロメテウス　自然神ティタンの一族なる巨人神、人類に火を与えたため、いま罰せられようとする。

合唱隊（コロス）　オケアノスの娘たち、海のニンフで白衣をまとう。

オケアノス　世界をめぐる大河、また大洋の主。ティタンの一族で、プロメテウスの叔父にだいたい当る。

イオ　アルゴス王イナコスの娘、ゼウスの愛をうけ、その妃ヘラの嫉妬から牝牛に変ぜられる。

ヘルメス　ゼウスの若い息子神で、伝令役。

場所

黒海の北、スキュティアの曠野の涯、巍峨として聳える岩山のもと。

〔序幕、権力と暴力、巨人プロメテウスを引っ立てて登場、ヘパイストスこれに従う〕

権力　大地の涯のとおい境、スキュティアの郷の、人の気もない荒れた野路へやってきたが、ヘパイストス、あなたは、父神が言いつけられた指図どおりによく気をつけて、任務を果たさなければなりますまい、こいつを、この不埒な奴をだ、高くそびえる巌へと磔けるんですぞ、不壊金剛の足枷につけ、縛めあげて。

それもあなたが自慢してる、あらゆる技の源という火の輝きを、あいつは盗んで人間どもにやったのだから。その罪過の償いを神さま方に当然せねばならないわけだ、それで、ゼウスさまの権威をあがめることも習おうし、人間どもに情けをかける癖も少しはやむようにだな。

ヘパイストス　権力に暴力君、君たち二人へのゼウスさまの御命令は、これでいよいよしまいになるのだ、もうはや何の故障も出まい、だが、私としちゃ身内の神を、ひどい嵐に吹きっさらしの岩角にこう無理やりと磔けるのは、どうにも気がすすまないのだ、それでもとにかく、勇気をふるってそれもやっつけねばなるまい。父上の御命令をなおざりにでもしといたら、大変だからな。

〔プロメテウスに向って〕正義をすすめる女神テミスの、慮りも高邁な息子（プロメテウス）よ、望まぬことだが、あなたの望みにもそむいて、こう解き放てぬ青銅のくさびで、この非人情な巌の上へと磔にするほかないのだ、そこではもう人間どもの声音もまた姿とても眼にはできまい、太陽の焼けつく焔に、身を焦がされ、肌の表の色も変えよう、また星を刺繡る衣に身を飾り立てる夜が光を蔽いかくす、その嬉しさもたちまちにして、暁の霜さえまた、昇る旭に消されてしまおう。そして現在身にふりかかる禍いの苦しみは、永遠にあなたを悩ませよう、あなたを救い出せる者は、この世にはまだ生まれてないから。

そうした報いをあなたは、人間をいとしく思う心根から受けるにいたった、というのも、神であるのに、神々の憤りにも一向ひるまず、人間どもに、正当以上のもてなしを与えたのだから。その償いにこの索漠とした岩角で、見張りをつづけるわけだが、直立したまま、眠ることも、膝を折ることもかなわず、どれほど嘆き悲しんでも、喚き立てても、甲斐はないことだろうよ、ゼウスの心は宥めすかしも難いのだから。誰にしろ、新規に力を握った者は、荒っぽいのが普通だものな。（三五）

権力　もう結構、何をぐずぐず役にも立たん泣言をならべてるんです、どうしてあんたは、神々にとり誰よりいちばん憎い奴を憎まないんです、あんたの特権ともいう火を人間どもにむざむざやった者だというのに。

ヘパイストス　血のつながりや、長い間の仲間というのは、変に強いのだ。

権力　そりゃもっともだが、父神の仰せを聴かず、従わないなどはとてもできますまい、その方がずっと恐いもんじゃありませんか。（三四）

ヘパイストス　いつもまったく君は無慈悲で、向う気が強いんだな。

権力　だってこいつのために嘆いたって一向たしにならないんだから、あんたも役に立たない無駄骨などは、折らないでおきなさい。

ヘパイストス　ああ、この腕の働きさえが、なんていまいましいものだろう。

権力　なぜ厭がるんです、別にこの現在の厄介事の、それが因ではないというのは、わかりきったことですのに。

ヘパイストス　それにしても、この働きを誰か別な人間が授かってたらよかったんだが。

権力　なんでもみんな厄介なことでさ、神々を支配すること以外は。だって、ゼウスのほかには、自由な者というのはないのですからね。

ヘパイストス　〔枷を指さしながら〕これでよくわかったよ、何ももう言い返すことはないんだ。（三三）

権力　じゃあさっさとこいつに枷をかけまわしてやりなさい、あんたがぐずぐずしてんのを父神が見たら大変ですよ。

ヘパイストス　そりゃあもう、見るとおりに、鎖もすぐと手もとにあるんだが。

権力　そんならそいつを、両手のぐるりにいっぱいの力をこめて、大槌で叩きつけなさい、岩にしっかり打ちとめて。

ヘパイストス　そら、やっつけるぞ、このとおりに、けしてやわな仕事じゃあなしに。

権力　もっと叩いて、しめつけて、けして緩めちゃあならない、こいつはどんな難儀にあっても抜け出す道を探し出すしたたか者なんですから。

ヘパイストス　もうがっしりと、こっちの腕は抜けないようにとめつけちゃった。（三〇）

権力　じゃあこっちの方も、締め金でしっかりと、とめてください、こいつがどんな巧者だっても、ゼウス神にはかなわないって覚れるように。

ヘパイストス　この人以外に、私を正しく非難のできる者はあるまい。

権力　今度はこの頑丈な顎をもった鋼鉄のくさびで、こいつの胸をぶち抜いて、力いっぱいとめつけなさい。

ヘパイストス　やれやれ、プロメテウスよ、あなたの難儀には溜息がでるばかりだ。

権力　あんたはまたもやぐずぐずいって、ゼウスの敵どものため嘆こうてんですか、気をつけなさいよ、我が身の上をいつかは嘆くことのないよう。

ヘパイストス　この有様は、君だって平気で見ちゃあおられまいだろうに。

権力　見てますとも、こいつが自業自得な報いを受けているところを。さあ、横腹にも、この締め金をぐるっとかけて。（三七）

ヘパイストス　そいつも、とうていせずばなるまい、だがそうがみがみ

言いつけるな。

権力　いやどうして、言いつけも、そのうえにけしかけもしますよ、今度は下のほう、脛をこの籠で手ひどく打ちとめるんだ。

ヘパイストス　それ、その仕事もやっつけたぞ、大した骨も折れずに。

権力　じゃあ、今度は、力いっぱいに手足の枷をぶち抜くんです。この仕事へ難癖をつける監督さんは、気むずかしやなんですから。

ヘパイストス　君の御面相は、君の舌がしゃべくることにそっくりだよ。

権力　ええ、いくらでも人情家ぶりなさい、でも、私の頑固さや気性のはげしさなんどを、とやかくいうのはやめてください。　(八五)

ヘパイストス　もう出かけよう、手も脚もすっかりがんじがらめにしたから。

権力　ここでさあ、威張り返ってるがいい、そいで神々の特権をかすめ取っては、その日暮しの人間どもにくれてやるんだな。その人間が、どうお前に、その苦しみを取り除いてやれるというんだ。神さまがたが、プロメテウス、つまり前から知恵を働かす者なんてお前を呼んでいるのは、まったく出たらめのことなんだな、我が身にさえも、前から知恵が及ばないんだから、どんなふうにして、この巧みから抜け出たもんかと。　(八七)

〔嘲笑いながら、「権力」と「暴力」退場、ヘパイストスも前後して退場する〕

プロメテウス　〔独白〕おお輝りわたる大空、翼も速い風の息吹よ、
また河々の、もとの泉、数知れぬ大海原の
波の秀の笑いさざめき、また万物の母なる大地、　(九〇)
さらにまた世界を見渡す日輪に訴えるのだ、
見てくれ、この私が、神々から、どんな仕打ちを受けているか、同じ神であるのに。
よく見ておいてくれ、どのような辱しめに
身を切り苛まれつつ、永劫の歳月を
私がこれから苦悩にすごしていくかを。
かくも無慚な縛めを、私に対して、
あの新しい神々の主権者は、工夫し出したのだ、
ああ、ああ、今もまた襲ってくる苦しみには
ただ呻吟するばかりだ、この苦悩はいったい
いつ、どのように、終りをつげるはずなのかと。　(一〇〇)
だが、私は何をいってるのか、何もかも未来のことを私は
はっきり　前から知っているのに。何一つ思いがけない
禍いが来るわけはないのだ、身に振り当てられた運命は
できるだけ平気でもって辛抱するほかはない、必然の力には
抗おうととうていだめなのは、もう百も承知のことなのだから。
だがこの今の身の仕合せを　黙ってすごすのもまた、
すごさないこともできはしない、なぜといって、人間に徳を
施したとてこうした取込めに、あわれや、繋がれてるのも、
つまりは尋ねさがして火の源を盗み取り、茴香の芯に
満ち満たして人間に渡してやった、それこそすなわちあらゆる技術
を　(一一〇)
人間に教え、大層な便利を授けることだったゆえ。
そのような罪を犯したその咎を、いましも私は償っているのだ、
吹きさらしの場所に、釘づけにされ、禁錮を受ける身となっては。
はてな、
何の響きだ、何の香りかな、あれは、目には見えずに通うて来るの
は、
天界からか、それとも人間界か、または両方の入れ交りにか、
世界の涯の、この岩山にまで渡って来る、それは
私のこのいたわりを眺めようとか、またはいったい、何を望んでだ、

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

見てくれ、私を、縛められた、この非運の神を、
ゼウスの敵として、ゼウスの宮居に
伺うほどの、あらゆる神々からも
忌み疎んじられている者だ、
あまりにも人間どもを、愛しすぎたというので。
はて、変だぞ、いったいこれはまた何の音か、間近に
鳥の羽音とも聞こえるのは。高い空は、軽やかな
羽ばたきの音に　ざわめき立っているらしいが、
何にもあれ、身に迫り寄るものはみな　怖い気がする。

（一二〇）

〔大洋神オケアノスの娘たちより成る合唱隊、白い衣を身にまとい、左手のパロドスより、あるいは宙釣り台に乗って一人ずつ登場〕

コロス　怖いことはございませんのに、
親身な者の群れですもの、翼を速く
競りあいながら　羽ばたかせ、この岩山へと
やって来ました私どものこの行列、
父さまの　御胸とても
やっとのことで　説きつけまして、
颯々と吹く　風の息吹に乗って来たもの、
それというのも、鋼鉄を打つ音の響きが
海底の洞の奥まで　透って聞こえ、
重々しげな乙女の　恥らいまでも消やしたもので、
鞋もはかずに、翼のある車に乗って飛んで来た次第。

（一三〇）

プロメテウス　やれやれ、大勢の娘をもったテテュスの子、また全世界を取り巻いて、休む間もない流れをめぐらす、父オケアノスの娘たちよ、よく見ておいてくれ、眺めてくれ、どのような縛めで磔にされ、この山峡の、岩山の突先に、誰として、羨やむ者もない見張りを続けていくか。

（一三五）

コロス　いかにも仰ぎ見ましても、プロメテウスさま、恐ろしさに、私の眼へは涙のもいやいがいっぱいにあふれかかります、御姿をこう眺めていますと、岩角へさらし者にされ、このような鋼鉄づくりの釘かすがいで、むごたらしくも縛められておいでの態に。それも、オリュンポスを、新しい舵の取り手が支配しておいでのため、新規につくった掟でもってゼウスさまが、無法な力をおふるいになり、現在は、昔の偉大な方々をさえすっかり、蹴落しておしまいでした。

（一四〇）

プロメテウス　ああ、この私を地の底にあって、死者を迎える冥府の王の、涯しを知らぬ無間地獄へと、ほうり込んでくれたらよいに。解けることのない縛めで、情け容赦もなくしばって。神にもあれ、はた他の誰にもあれ、この態を見て、手を叩くことなどないよう。だが今はこの身も無慚や、高空の風になぶられ、仇の奴らの慰みものにされているとは。

（一四五）

コロス　神々のうちのどなたが、そのようにもつれない心をお持ちでしょうか、御様子を見て喜ぶほどに。ゼウスのほかは、誰としてあなたの不幸に同情して、怒りを覚えぬ者がありましょう。けれどもゼウスは始終悪意を抱き、かたくなな心を棄てずに、ウラノスの子の神々を平らげようとなさってから、その御心を飽かすまで、また誰かが現われその掌で、犯し難いその権威を、奪いとるまでやめないでしょう。

プロメテウス　だがいつかは、今こそ厳しい手足の枷に、この辱しめを受けるとはいえ、私を再び必要とするときが来よう、神々の司にさえも。そのために、神笏も尊い位も、奪われるという、その新しい謀計を私に明かしてもらうためにだ。だがけして、説得の甘い口説の魔術とてもこの私を賺しはえまい、また残酷なおどかしに恐れすくんで、その秘密をけして私がもらしもすまい。むごたらしいこの枷からときはなったうえ、この辱しめの償いを、しようとみずから言わぬうちは。

（一五〇）

コロス　あなたはほんとに剛毅なお方、このむごたらしい苦艱にも一向めげずに、あまり自由な口をおききになります。でも私の胸はふかい

怖れに貫かれ震えながらに、この苦難のはてを、いったいあなたはどこへ、行き着くものとお見さだめかと、御身の上を気づかうのです。クロノスの御子の神は、動かし難い厳しい性と、宥めもすかしもできない心をお持ちの方ゆえ。（一八）

プロメテウス　私も知ってる、ゼウスの心はあらあらしく、正義を自分の気儘にしてると。だが結局はあのことのためうちひしがれて、いつかはやさしい気質になろう。して頑なないきり立ちをもついにやわらげ、仲直りと友愛とを、前から望んでいる私に、彼の方からも、いつかは望んで進めて来よう。（一九五）

コロス　その次第をのこらず私どもに打ち明けてお話しください。ゼウスさまはいったいどうしたかどであなたを捉まえ、かようにひどい辱しめや、はげしい責苦をお与えなのです。どうか教えてくださいませ、もしお差し支えがありませんなら。

プロメテウス　その始終を物語るさえつらいことだが、黙っているのもまた苦痛だ、なにもかもみな不運な仕儀とて。（二〇〇）

つまりは、かつて神々が、怒りを発して、互い同士の争いが起こるとたちまち、それこそゼウスが王位につくようクロノスを王座から追い出しにかかる神々もあり、また反対にゼウスをけして、神々の支配者になどさせまいと、望む神々もあった。そのおり私は最善の策を立てて、天と地との子の、ティタンどもに勧めたのだが、その説得も甲斐がなかった。彼らは狡智にたけた計略をさげすみ、頑な思い上りに、力で難なく、勝ちを得ようと考えたのだ。だが私は、母のテミスすなわち大地から――とは、姿は一つながらに名前は沢山にある女神のこと――一再ならず、将来への予言をかねて聞かされていた、つまりは、力においてまさり、かつ暴力をふるう者ではなくて、計略で敵を制する者こそが勝利を得ようと教わっていた。そうしたことを、私はいって聞かしてやったが、彼らはてんで耳をかそうともしなかった。されば、その時、さしあたっての最上の策は、我からと望んでゼウスの望みに応じて、母親ともども、味方につくほかないと見えた。そこで私の計略により、タルタロスの闇の底いの奈落のうつろに、生れも古いクロノスが、一味徒党ともろともにかくし込まれることになったのだ。こんな助けを私の手から受けてるくせに、神々の僭主は私へ、こんなにひどい刑罰をその返礼に返したのだ。そもそも僭主という奴らには、こうした病いがつきものなのだ、味方を信用できないという。

されば お前がたずねる次第を、どういうわけでこのように私を苦しめようとするのか、それを話して聞かすとしよう。（二一九）

すなわちゼウスが、父の王座につくやただちに、神々にもそれぞれ褒美を分けて与え、めいめいに統治の範囲を定めてやった。だがあわれな人間どもには、なんの考慮も払わずに、その一族をすっかり滅ぼし、それからはほかの種属を、新たに創る考えだったが、しかもそれに、私のほかは誰一人とて、反対しよう者さえなかった。だが私はそれをあえてしたのだ。人間たちを滅ぼしつくされ、冥界へ赴く運命からは救ってやったが、そのため私が、こんな責苦に、悩みつづけることになるとは、受けるも苦しく、見るもみじめな、こうした責苦に。人間たちへの憐れみをさきにしながら、身は憐れみを受けようとも思いがけず、無慚や、こうした仕打ちにあっているのだ、ゼウスに対する恥さらしな見せものとして。（二四二）

コロス　まったく鉄の心臓で、岩から出来てる者といえましょう、プロメテウスさま、あなたの難儀に同情して怒りを覚えないというなら。私どもはこの有様を見ないでおけばよかったものを、こう見たうえは、胸を痛めるばかりですから。

プロメテウス　まったく親しい者には見るも痛ましい限りだろうな、私の姿は。

コロス　それ以上に、もっと何かをしたとでもおっしゃいますの。

プロメテウス　人間どもに、運命が前から見えないようにしてやった。

コロス　そうした患いを癒やすのには、なにを見つけておやりでした。（二五〇）

プロメテウス　目の見えぬ、盲な希望を与えたのだ。

コロス　たいへん役に立つものを、これはまた、人間どもにおやりでし

たこと。

プロメテウス　それに加えて火をまで、私は、彼らにくれてやったものだ。

コロス　そんなら今は、その日限りの人間どもが輝きわたる火を持ってるので。

プロメテウス　それからして、さまざまな技術を学び知ることだろうが。

コロス　いかさまそうしたかどで、ゼウスさまは、あなたを……

プロメテウス　ひどい目にあわせ、禍いをけして弛めようとしないのだ。

コロス　それであなたの責苦に、前からきまった期限というのはないのですか。

プロメテウス　べつになんにもない、あいつがよいと思う時まで。（二六〇）

コロス　なんでよいなどと思いましょう、どんな望みがございますの。お思い違いがわかりませんの。間違いをなさっておいでと、言うのも私に嬉しくないこと、あなたにとってはつらいことゆえ、それはまあやめにしといて、なんとか呵責をのがれる道をおさがしなさいませ。

プロメテウス　手軽なことだ、災難を身に受けない者が、ひどい目にあってる者らに、あれこれと忠告するのは。こうしたことは、みな私にはよくわかっていた、私は自分から進んで咎を求めたのだ、それを格別否定はしない。人間どもを助けたばかりに、自分が呵責を身に引き受けた。だがしかし、こうした仕置きに、そそり立つ巌の上で身を責めようとは、夢にも思わなかったものを、人里遠く、荒れはてたこの岩山につれて来られて。それでもけして、現在この身に迫る苦艱を嘆いてはもらうまい、それよりも、あなた方には地に降り立って、これから私を襲おうという運命をまず、聞いてもらいたい、一部始終を残りなく知ってくれるよう。そうしてくれ、私の言うよう承知してくれ、そいでこの苦しみを分けあってくれ、不幸というのは、その時々にそれからそれへと、順々にめぐりめぐって人間に取りつくものだ。

コロス　よくお話を、私どもは悦んで伺っております、仰せのとおりに。

プロメテウスさま、されば今とて、足どりも軽やかに、進みも速い乗物を捨て、大鳥どもの、清らかな路、その大空をあとにして、このそそり立つ丘へも降りてまいったもの、されば、あなたの御難儀を、のこるくまなく、伺いたいと存じております。（二六五）

〔このとき大洋神オケアノス翼のある馬に跨って登場〕

オケアノス　長い旅路を経めぐってから、とうとう御身のところへやって来たのだ、プロメテウスよ。翼も速いこの大鳥にくつばみも食ませず、意志の力で駆りたてながら。よく心得てくれ、わしには御身の不幸が、ひとごととは思われぬ。これは必ず血のつながりというものが、是が非でもこうならせるに違いあるまい。血縁を別にしても、御身よりもっと私が大切に思っている者はほかにないのだ。これが本当だということはわかってくれよう、無用な世辞を言うのはわしには出来ないこと。だから、さあ教えてくれ、御身のためにはどうしたらいいか。オケアノス以上に御身にとって頼もしい友があるとは、よもや御身も言われまいから。（二七〇）

プロメテウス　ああ、なんということか、あなたまで私の苦悩を眺めようとやって来たか。どうしてあなたがあえてしたのか、あなたの名を負う海の流れと、巌を屋根の天然の洞をあとに、鉄を産むこの里へ訪ねて来ようと。私のこの身の上をながめてから不幸をともに憤ろうとてやって来たのか。さあ見てくれこの姿を、これがゼウスの味方の態だ、その主権をば力を合わせて、うちたてたというこの私が、どのような責苦に彼のために付せられてるかを。（二七八）

オケアノス　いかにも見ている、プロメテウスよ、して御身に最善の道を勧めたいのだ、もとより御身は、知恵分別に富んでいようが。身の程をよくわきまえて、新規な仕方に調子をよく合わせることだ。神々の支配者も新規になったのだからな。だがもしそんなに乱暴で、鋭い刃をもった言葉を吐きつづけるなら、きっとゼウスは、御身よりはるかに高い御座にいながらそれを聞き込み、ついには今の御身のかさねがさねの悩みさえ、児戯にひとしく見えることにもなりかねまい。だ

から、まあ気の毒ながら、御身も今のいきり立ちを棄て、この禍いからのがれる道を求めるがよい。こうした勧めは、あるいは陳腐に聞えもしよう、だがしかしだ、この有様は、あまりにも思い上った舌に対する、プロメテウスよ、報酬なのだ。御身はかつて弱気を知らず不幸にも負けたことがない、されば現在する災難の、なおそのうえに災いを加えようという。だからまずわしをともかく先生として見習い、刺股にわざわざ脛をうちつけるのはやめにしたがいい、我々を支配する独裁者は、気が荒く誰にはばかることもないのをよくわきまえてな。ではこれから、わしは出かけて行って当ってみよう、もしやこの苦艱から、御身を解放できまいものか。御身は、それゆえおとなしくして、あまり放言しないがよいぞ。それとも、知恵が廻りすぎる御身でも、はっきりとは覚らないのか、野放図なおしゃべりには、罰金が加えられるというのを。（三三）

プロメテウス　うらやましいことだな、あなたが咎めもうけずにいるとは。私の企みのすべてに与り、大それたことをやっときながら。今はもうほうっておいて、よけいな世話はやいてくれるな。どんなにしてもあいつは説得できまい、いうことを聞く奴ではないから。それよりも、よく気をつけろ、自分がうっかり災いを受けないように。（三三）

オケアノス　自分自身よりずっと、御身は、身近なものを教えるほうが得意なのだな。いや、文句でなしに、実際この眼で見たとおりだ。が、やり出したからは、けして引き留めてはくれるな。自信があるのだ、自信が、わしの願いをゼウスが肯いて、この呵責から御身を解放してくれようという。（三四）

プロメテウス　それについては感謝している、けしてそれを忘れはすまい、御身の熱意は、まったく欠けるところがない、が、もう骨折りはやめにしてくれ、骨を折ってもだいいち無駄だ、なんの役にも立たないのだから、よし骨折ってくれるつもりでも。だから、じっとしていろ、累を身に及ぼさないよう身を却けて。私はたとえ身に禍いはうけようとも、そのため、よけいな人が苦労を受ければよいなどけして望みはしない。とんでもないこと。今とても兄上アトラスの身の成行きを、思うて胸をいためているのだ、西方の里に当って突き立っている、天地の柱を、両肩にもたせかけながら、腕に支えも容易ではない重荷を負って。それにまた、大地の子なるあのキリキアの洞穴に住む、怪神を見て哀れを覚えた、あの百頭の恐ろしい怪生、勢い烈しいテュポンが力ずくで取りこめられているのを。彼こそ神々に刃向って立ち、そのすさまじい頤からは殺戮の息吹をあびせつ、眼からは物凄まじい火光を、稲妻ともはためかせて、ゼウスの支配を暴力をもち倒そうとした。だがしかし、ゼウスの眠りを知らぬ矢は、彼を目がけて襲いかかり、いかずちは、火を吐きながら、天より落ちて彼を撃ちつけ、傲り高ぶる大言壮語を叩きつぶしてしまったのだ。というのも、心肝をまっこうから衝きとおされて、焼きつくされ、雷火で力をとりひしがれてしまったもので。そのはてが今はまったく身をもてあまし、長々と延びた体を横たえているばかりだ、海の迫った瀬戸の近くに、アイトナの山の、根に押しこめられ。その峰々の頂きに座を占め、灼熱した鉄石をヘパイストスが、打てばそこからいつか、火焔の河が迸り出て、その獰猛なあぎとをもって、みのり豊かなシケリアのひろい田畠を、一飲みにしよう。このようにテュポンは烈しい怒りを煮えたぎらそう、近づきがたい焦熱の、焔を吐き出す疾風の矢をなげうって。たとえ、ゼウスの雷電に、焼きつくされてしまったとはいえ。（三六）

だがあなたは、それも承知のこと、また私を師匠に要るわけでもなし、自分の分別どおりに、身の安全を計ったがよい。私のほうは、現在のこの仕合せに耐えてゆこうから。ゼウスの思慮が、その腹立ちを鎮めるときまで。

オケアノス　ではプロメテウスよ、御身はこの諺を知らないのか、言葉（条理）は、乱れた心の医師だという。（三八）

プロメテウス　もし人が機宜に応じて心をやわらげ、いきり立つ心を無理やり、抑えつけようとしないなら。

オケアノス　では熱心さと敢為の気象と、この中にそもそもどんな禍い

がひそんでいると御身はいうのか、教えてくれ。
プロメテウス　度を超えた苦労と、軽率なおめでたさばかりだな。
オケアノス　ほっといてくれ、わしがその患いを患うままに。最上策だよ、十分思慮を用いながら、慮るとは見えないことが。
プロメテウス　その過ちは、きっと私の咎ということだろうよ。
オケアノス　明らかに、御身の言葉は、家へとわしを追い返すのだな。
プロメテウス　私への悼みの言葉が、御身に対する敵意を起させてはなるまい。
オケアノス　あの新しく、全能の王座についた者の胸にか。
プロメテウス　そいつの心にけして憎まれないよう、気をつけるがいい。
オケアノス　御身の不幸が、プロメテウスよ、よい手本だというのか。
プロメテウス　行け、帰ってくれ、その分別を大事にしなさい。
オケアノス　言うまでもない、御身の吐いた言葉どおりだ。高空のひろびろとした通い路に、四足の鳥はもうはや翼を羽ばたきそめている。して、我が家の厩に、膝を曲げて憩えることを喜んでよう。

〔オケアノス退場〕

コロス　お歎きするほかありません、呪わしい
あなたのさだめを、プロメテウスさま、
やさしいまなこを滴りおちる
涙の流れは、うるおう泉を
さながらに頬をぬらします。
それもみな、ゼウスさまが有難くもない
自分勝手な掟によって威権をふるい、
古い昔の神々に、権勢ずくの
思い上った圧迫を加えられるため。

ありとある国々はもうずっと前から
悲愁のなげきにみたされています。

大昔から世に知られている、
あなたと同じ生れの神々、その広大な、
栄えを皆が惜しんでのこと。
または聖いアジアの里に移って
住居を構えるほどの人らも、
大変な苦悩にみちたあなたの不幸に
つらい思いをお寄せするのです。

コルキスの里に住まいする、
いくさを畏れぬ乙女たちとて、
またこの世界の涯というマイオティスの
湖のあたりを占めて、
スキュティアに牧する人々、

またアラビアの勇士の精粋、
カウカソスの山並み近く
聳える丘に城を構えて、
穂先も鋭い槍をうち探り
戦さにはやる軍勢とても。

ただ一人だけ、(あなたの)ほかには、
拝見しました、金剛の枷につながれ、
ひどい苦労に虐げられているティタンを。
アトラスさまです、あの人並みすぐれ力も強い
お方が、天の星々や　支え柱を
青銅の背に負って、呻いているのを。

その痛ましい叫びに答えて、
大海原の砕ける波は

わだつみの底いからして呻きあげます、
冥界の奥、大地のうつろの鳴りとどろきも、
潔らかな流れの川の、源もおなじく慨き。

プロメテウス　どうかけして、私が頑迷さから、また擅まな思い上りで黙っているとは思ってくれるな。十分それは心得て、胸を痛めるのだ、自分がこうも、辱しめられている様を見て。だがいったい、この成り上りの神々の栄えを、私以外に誰がそもそも、不動のものにしてやったのか、いや、そのことは口をつぐもう、あなた方も知っての話を言うだけだから。では人間どものみじめな様子をまず聞いてくれ、どんなにまえは幼稚だったのへ、私が思慮をつぎこんでから、わきまえを持たせてやったか。だが私がこれから話す事柄も、別に人間どもを咎めるのでなく、ただいろんなものをくれてやった、その好意を説いて聞かせるだけだ。（四六）

彼らはもともと、何かを見ても、ただいたずらに見るばかり、聞いてもさとるわけでなく、さながら夢の世界の幻のよう、命の限りを、ゆきあたりばったりに過ごしていった、また温かい煉瓦造りの家とても、材木の仕立てようとて知らずにいて、ちっぽけな蟻どものよう、地面の下の日も当らぬ洞穴の奥どに住まいしていた。彼らにとってはあらしの冬も、花咲き匂う春の日も、また実りたわわな夏の日を見分ける定かなしるしとてもなく、ただ無考えに、なにもかもやっていたのだ、私が星辰の昇る時刻や、見分けとてもつけ難い、その没る時刻を教えてやるまで。（四九）

ことにまた、気のきいた工夫の中でもいちばんの、数というもの、それも私が彼らのために見つけたものだ、またムーサの母なるまめやかな働き女、万象の記憶をとどめる文字を書きまた綴るわざも。あるいは野生の獣を捉えてつなぎ、軛について、働くようにも私が最初にしてやったのだ、人間たちの大変な骨折りを代ってやるよう。また富貴を極める者の豪奢な荘厳にもと、馬どもを手綱にならして車につけた。白帆の翼に海上を翔ける、船頭たちの乗物を造ったのも、私にほかならない。

このようにも、人間のため工夫をさまざま凝らしながら、あわれや、自分のためには、どうしたらこの現在の苦難を免れようとの、うまい考え一つさえ浮かばないとは。（四七）

コロス　その災難にお悩みようは、似合わしくもない見ともなさ、分別も忘れ、お迷いですとは。下手な医者が病気にかかったようにしょげ込み、自分の体にどんな薬を使えばいいかもわからぬみたいで。

プロメテウス　このうえすっかり私の話を聞いたら、いっそうあなた方とて、驚くだろうな。どんな技術や方便を私が案出したかを。中でもいちばん大したことは、今までは誰が病気になったにしても、何の防ぎの手段もなかった、食む薬草も膏薬も水薬もない、こうして薬がないために彼らはどんどん倒れていった、私が彼らに病いをやわらげ癒やす薬の調合法を教えるまでは。今ではそれで、あらゆる病いを防いでいるが。また私は占い方の種々な次第を分って、初めて夢見によって、そのどれが現実になるかを判断してから、見分け難い言葉の端々、さては道に出遭った縁起についても、吉凶を教えてやった。また爪の曲った猛禽どもの飛び交いにも、明確な判じ方を示してやった、どのようなのが吉兆で、どれがまた凶兆かを。またその一々がどんな習いをもっているか、またどれとどれとが互い同士に敵であるか、また仲好くして一緒にいるかを。あるいはまた臓物の滑らかさを――どんな色の胆嚢が神々の嘉するところか、また肝葉のどんな奇しい姿が吉であるかも。また脂肉にくるんだ腿骨、あるいは長い背骨を火焙りしては、難かしい筮占の術にも、人間どもを指導もし、焔の色の占いに、眼を見開かせてもやった、それまでは霞がかかっていたものを。占いのことはそれくらいとし、今度は地中に深くかくされている人間にとり役に立つもの、青銅、鉄、白銀、黄金を、いったい誰が私よりさきに、見つけ出したと主張できよう。断じて誰もあえてすまい、出たらめを言うつもりでなければ。一言にして言えば、なにもかもひとまと

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com